

「子育ては親を育てることから始まる」  
 幼児教育に関する長年の功績に県知事表彰

# 松下文代 さん

学校法人かわね学園さゆり幼稚園園長（徳山）



耐震化を施した新園舎が今年3月完成。記念して開かれたコンサートには大勢の人が詰めかけた

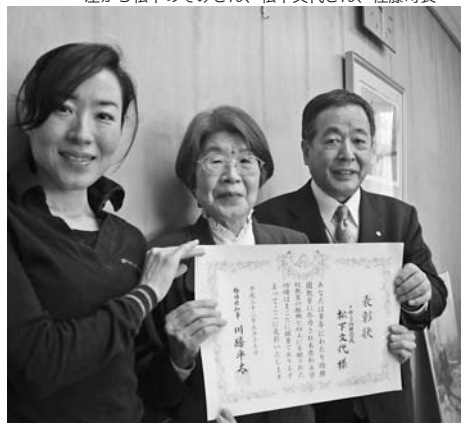


Matsushita Fumiyo

長年さゆり幼稚園の園長として、地域の子どもたちを見守り育ててきた松下文代さん。このほど私立学校教育振興功労（県知事表彰）を受賞し、その喜びを佐藤町長に報告した。さゆり幼稚園は1965年、当時の文部省から認可を受け開園。以来、川根地域唯一の幼稚園として地域に根付いた幼児教育を推進してきた。「さゆり幼稚園の前身は教会の日曜学校なんです。当時、地域の強い要望があつて、幼稚園の設立を決心しました。県の関係機関に何度も足を運んでお願いし、正式に開園の認可がおりたのが1965年。それから50年という長い年月が経ちました。小さな子どもを預かるということは「大きな責任」が伴うと文代さんは言う。「子どもたちと一緒に過ごすことができる喜びを感じると同時に、責任の重さもかみしめています。今、小さなお子さんたちを預かる上で、一番大事にしているのが子育ての『親学』。子どもと一緒に親も育つということです。わたしたちも親御さんと一緒に考え、一緒に学ぶ、それがさゆり幼稚園であり、ここが幼児教育の出発点だと思つています」。

文代さんの娘のぞみさんも同幼稚園で教諭として携わっている。「娘がわたしの意志を継いでくれていきます。そのことがとてもうれしい。これからも力を合わせて頑張っていけたら」と、話にも力がこもる。報告を受けた佐藤町長は「町としても私学が頑張ってくれていることが非常にうれしく思う。建学の精神もすばらしく、町としてもできるだけ応援したい」と話していた。「今後もさゆり幼稚園が皆さんの心の古里になれるよう、頑張りたい」と話す文代さんの言葉が、とても力強かった。

左から松下のぞみさん、松下文代さん、佐藤町長



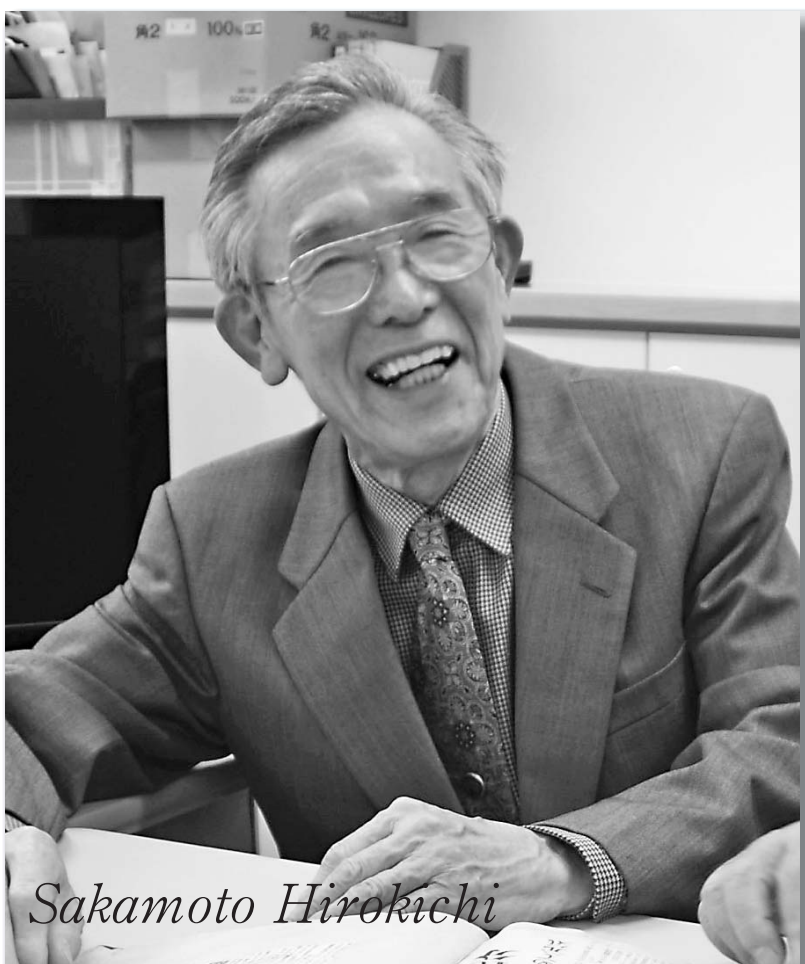
「このまま埋もれさせてしまうのは惜しい」  
 収集した新聞記事スクラップブックを町に寄贈

# 坂本廣吉 さん

（本町上岸出身・現静岡市）



段ボール6箱に収められたスクラップ。政治社会・スポーツなど、見やすく分類されている。



Sakamoto Hirokichi

本町上岸出身、現在は静岡市在住の坂本廣吉さん。昭和35年から収集・保存してきた静岡新聞などの記事のスクラップブック（昭和35年から平成元年分）を、町教育委員会に寄贈。5月20日、仲介者の梶山泰司さんと共に総合支所を訪れた。今回寄贈されたスクラップブックは、なんと158冊。段ボール箱で6箱にもなる。昭和35年から約30年間の世界の歴史、日本の歴史、そして川根本町の歴史がまつられている。廣吉さんが自身の「自分史」を作成する際、時代背景を考察できるようにと、長年新聞記事を切り抜いてきた、いわば歴史の教科書だ。このスクラップブックを手取るのと、廣吉さんの丁寧な作業ぶりがよく分かる。古い記事は黄色く変色しているものの、しっかりとりの付けされ折られたまわっている。冊子ごとに政治、スポーツなどに分類され、読む人のことも考えたつくりとなっている。「全国に衝撃を与えた『金婚老事件（寸又峽）』についてはね、特に大事だと考え、あえて新聞を切り抜かず原型のまま保存したんですよ。そのあとの特集記事なんかもまとめて保存しておきました」。

廣吉さんと佐藤町長が、段ボールからスクラップブックを取り出し、昔の記事を見ながらしばし歓談。「佐藤公敏さんが掲載された記事もどこかにありますよ」と廣吉さんが話すと、町長も驚いた様子で照れ笑いしていた。佐藤町長は「個人で長年にわたって収集された貴重な資料。快く寄贈していただき本当にありがたい。大切に活用していきます」と話した。廣吉さんは「このスクラップはコピーではなく、本物の新聞を切り抜いて貼り合わせたものなんです。だから価値があるかなと思います。このまま埋もれてしまうのは惜しい資料と思い、今回の寄贈を思い立ちました。町で活用してもらえれば、こんなにうれしいことはありません。自由に使ってください」と目を細めた。町教委では、このスクラップブックに目録をつけたあと、貸し出しやコピーへの対応をしていきたいとしている。

左が坂本廣吉さん。奥に見えるのが仲介者の梶山泰司さん

